白金薮

５月号

平成28年５月発行　　第６３号

白金葭定例句会案内＆拡大句会のお知らせ＊

六月一七日(金) 12:00～15:00 アビスタ第三兼題：柚の花、鷭

＊六月三〇（木） 11:30～15:30 拡大句会（銀座らん月）

七月十五日（金） 12：00～15：00 コビアン：蓮見舟吟行

八月は熱中症などを恐れ休みます。

六月一七日（金）分兼題（柚の花、鷭）参考句

富士大きく見えてしろじろ柚子の花　和知喜八

色欲もいまは大切柚子の花　草間時彦

花柚子や筆談まずは自己紹介　宮崎斗士

木屋町の八百屋に柚の花売れる　田中冬二

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間　ばせを

掌に花柚のせつゝ片折戸　泉鏡花

花すでに柚子の香りや柚子の花　三宅 静枝

喪の帯を解く鷭の声かぞえつつ　渋川京子

鷭ありく川杭がくれたそがるゝ　正岡子規

子育ての鷭幾たびも餌を運ぶ　るしゃな

鷭笑う孵りし雛を引き連れて　umiikada

鷭鳴くや橋より暮るる輪中村　西本文子

鷭飛びて利根こゝらより大河めく　菅裸馬

四つ這ひに蓮植うる人鷭歩む　田中灯京

月例句会報（'16／5／20　8名欠2（麦飯、初夏）

麦の飯稗飯銃後と謳はれし　飯田孝三

麦の飯もこもこ噛んで地獄耳

葭切や霞ケ浦は雲湧いて

木洩れ日を少女五月はルノワール

大仏の顔を見あげる初夏の風

巣の燕のみ騒がしき老人館　増田陽一

草田男に菓子の句多し夏兆す

麦飯と学童疎開敵の空

妻のゐる病棟みえて蝶の昼

もぐら出づ交配終へし梨畑

雨の葭原葭切の鋭声湧く　光成高志

山盛りの麦飯茶碗鷲づかみ

馬の背の初夏の街道東へ
強風の中や田植機田を進む
楠の落花神域黄に染める

なま街道きて観音のご開帳
夏初め乗馬衣装で帰りをり
麦飯を喰ひて入歯の齢かな
更衣学生提げる頭蛇袋
柳絮とぶ天幕を張る如くして

光　みち

山の湯の宿に見下す朴の花
麦飯や父の大きな飯茶碗
桐の花娘三人嫁がせて
初夏や素足にふみて浜の砂
山つつじ単線駅の大時計

吉羽多美子

お大師の石の草履に若葉雨

倉田紀子

朝あさの脛に灸ぞ朝曇
麦の飯藷飯嫌ひ昭和過ぐ
夏帽子点字の葉書投函す
二杯目の麦飯女ざかりかな

松村幸一

麦めしの弁当恥づかしかりしかな
饐ゑさしてならじお櫃の麦の飯
翡翠に歓喜のごとく咥へられ
手賀沼のスワン声なき夏はじめ
はっきりと遥かに初夏の潮目かな

武者昭七

一日ごと闇の濃くなる木下道
麦飯の零れ易きを嘆きつつ
新緑や吉野大夫の墓探し
葉桜に見え隠れして鳥の居る
一滴の雨粒に逢ふ五月闇

初夏や満員御礼フトン飛ぶ　浅野正美

麦飯に山芋かけて父がゐる

そよげるは人住まぬ家の小判草

囀りて枝うつりする巣立鳥

熟すまで待てと葉かげの実梅かな　青木啓泰

炊きたての麦飯ふっくら初燕

土のない野菜ばかりや道の駅

生姜の葉きれいにそろえ道の駅

水張って植田今日から夜に入る

春の月思い出したくない話

選句結果（数字は入選数　左添書きは添削句）

5　妻のゐる病棟みえて蝶の昼　陽一

4　麦の飯もこもこ噛んで地獄耳　孝三

4　葭切や霞ケ浦は雲湧いて　〃

3　麦飯に山芋かけて父がゐる　正美

3　初夏や素足にふみて浜の砂　多美子

3　手賀沼のスワン声なき夏はじめ　幸一

3　麦飯や父の大きな飯茶碗　多美子

2　はっきりと遥かに初夏の潮目かな　幸一

2　お大師の石の草履に若葉雨　紀子

2　土のない野菜ばかりや道の駅　啓泰

2　朝あさの脛に灸ぞ朝曇　紀子

2　草田男に菓子の句多し夏兆す　陽一

2　そよげるは人住まぬ家の小判草　正美

2　新緑や吉野大夫の墓探し　昭七

2　木洩れ日を少女五月はルノワール　孝三

2　二杯目の麦飯女ざかりかな　紀子

2　もぐら出づ交配終へし梨畑　陽一

1　生姜の葉きれいにそろえ道の駅　啓泰

1　大仏の顔を見あげる初夏の風　孝三

1　葉桜に見え隠れして鳥の居る　昭七

1　桐の花娘三人嫁がせて　多美子

1　強風の中や田植機田を進む　高志

1　翡翠に歓喜のごとく咥へられ　幸一

1　麦の飯藷飯嫌ひ昭和過ぐ　紀子

1　麦飯の零れ易きを嘆きつつ（疎開生活ありき）　昭七

麦飯の零れ易きを嘆きつつ　啓泰

1　水張って植田今日から夜に入る　啓泰

1　初夏や満員御礼フトン飛ぶ　正美

夏場所や満員御礼フトン飛ぶ　陽一
巣の燕のみ騒がしき老人館　高志
山盛りの麦飯茶碗鷲づかみ　昭七
一日ごと闇の濃くなる木下道　孝三
麦の飯稗飯銃後と謳はれし　みち
なま街道きて観音のご開帳　多美子
山の湯の宿に見下す朴の花　高志
楠の落花神域黄に染める　みち
乗馬より帰る靴下夏初め　啓泰
夏初め乗馬衣装で帰りをり　みち
春の月思い出したくない話　陽一
麦飯を喰ひて入歯の齢かな　啓泰
麦飯と学童疎開敵の空　正美
炊きたての麦飯ふっくら初燕　みち
囀りて枝うつりする巣立鳥　紀子
更衣へて学生の提ぐ頭陀袋　幸一
更衣学生提げる頭陀袋　高志
夏帽子点字の葉書投函す　昭七
饐ゑさしてならじお櫃の麦の飯　幸一
雨の葭原葭切の鋭声湧く　正美
一滴の雨粒に逢ふ五月闇　高志
麦めしの弁当恥づかしかりしかな　みち
熟すまで待てと葉かげの実梅かな　正美
馬の背の初夏の街道東へ　高志
柳絮とぶ天幕となり何処へと　みち
柳絮とぶ天幕を張る如くして　正美
山つつじ単線駅の大時計　光成高志

一句鑑賞

初夏や満員御礼フトン飛ぶ　正美

たった今夏場所が終わった。横綱白鵬の強さが際立って誰も負かさなかった。掲句は初夏の兼題にて作られたが、「夏場所」に直して今年の句とされた方がよい。おそらく、稀勢里が白鵬を負かして満員御礼のファンの座布団が飛んで興奮のるつぼと化す国技館を夢見ての作と見た。句会当日が取り組みの日であったので、寄り道せず家路に急ぎテレビ観戦をした。現実は負けてがっかり。千秋楽に軽量の横綱を倒したから、来場所につながると言われているとか、牛久に近い啓泰さんの応援言葉が聞きたいものだ。

手賀沼のスワン声なき夏はじめ　幸一

スワンは白鳥のこと。スワンボートではない。留鳥になっていて三百もいるとか。私の前方の手賀川にもゐることが多い。大体白鳥はあまり鳴かない。静かである。蓮見船発着所あたりの静かな手賀沼の佇まいなど、初夏にはしみじみした良さがある。

妻のゐる病棟見えて蝶の昼　　陽一

入院されている病棟が見えてきた時一頭の蝶が飛んできた。ちょい待っておくれ、すぐ行くからなと蝶に声をかけている。妻が蝶になり、蝶が妻になっている陽一さんのこころが伝わってくる。

一句鑑賞

土のない野菜ばかりや道の駅　　武者昭七

生姜の葉きれいにそろえ道の駅　　〃啓泰

街道のどこにも道の駅と称する建物を見るようになった。その土地の新鮮な特産品をそろえて並べてあるので珍しく好評でもあった。なつかしい土の香りがしたのだ。最近では街のスーパーなみの品ぞろえときれいに手を加えられた野菜や鮮魚が並んでいるのが多くなって、なにか物足りなさと寂しさとを抱えて店を出ることが多くなった。掲句の作者の思いも同じだろうか。

強風の中や田植機田を進む　　高志

一家うち揃って横一列になって腰をかがめ一本ずつ苗を植えていく風景が消えて久しい。これは明るい現代の田植風景である。里山のまばゆいばかりの新緑の木々が強風に身をよじっているのをよそに田植機がどっしりとした体つきで進んでくる。田植機が田を進むのは当たり前だけれど「タ」音の重なりが重量感を伝えてくるのがいい。

麦飯と学童疎開敵の空　　陽一

昭和十九年夏に小学校（当時は国民学校）児童生徒の集団疎開が始まった。東京の空も敵機の思いのままに飛び交う危険な空となりつつあったからである。子供らは「学童」と呼ばれ家族から引き離され寂しさとひもじさとに懸命に耐えながら田舎暮らしになじもうとしたものだ。箸の先からぼろぼろと零れ落ちてしまう麦飯はまだしもで藷ばかりの日もあった。作者も筆者もそのひとり。二度とあんな思いはしたくない。

麦の飯稗飯銃後と謳はれし　　孝三

「銃後」とは戦場の後方の意味だ。前線で戦う兵士の苦労を想えというのだ。銀シャリと呼ばれた白いコメはもう庶民の暮らしからはるかに遠かった。だれもが空き腹をかかえてただ黙々と耐えていた。

二杯目の麦飯女ざかりかな　　紀子

「麦飯」というと戦中育ちの老人たちにはみじめな思い出しかないけれども今や麦飯の評価は逆転しつつある。麦飯も面目一新というところか。

一句鑑賞

一ひと日ごと闇の濃くなる木下道　　飯田孝三　昭七

折しも百樹芽吹きざかりの林間を行く。今更、四時運行の機微に感じ、萌え出づる自然の息吹に驚くので

ある。日比谷公園を目近に見下す新緑風景を思い出した。樹々の芽吹きの遅速につれて、新緑の濃淡分布が日々刻々、所を変える。朝、眩いばかりだった若葉が、夕方には緑を籠め、旬日を待たず、一帯が深い緑に覆われる。余談恐縮、掲句は、いわばこれを下から見上げた図だが、ただの情景描写ではない、たゆまぬ自然の摂理にふと頭こうべを垂れる、そんな思いが伝わる。

麦飯に山芋かけて父がゐる　正美

恐らく今は亡き父上だろう、兼題「麦飯」をえて、俄かに在りし日の身近なお姿が瞼に浮かんだのだ。「父がゐる」が眼目。“えらい”、わたし達とはかけ離れている感じだったが、そぞろ懐かしい。麦飯に山芋をかけて召し上がる動作しぐさまでが見えてくる。舌にぞろぞろ、なんであれが美味しいんだろ、幼ごころにそう思ったのが、まるで昨日のことのように思い出されるのである。「麦とろ」（季語）をいうだけでは、この心情は伝わるまい。

朝あさに脛すねに灸ぞ朝曇　紀子

「朝曇」が決まる。五月、若葉時は体調を崩し、気分もふさぎがちだが、その気鬱さと朝曇の気象とが無性に響き合う。開口、ア音七復のリズムは、中七「スネニヤイト」で、一旦変転して自在、強調の終助詞「ぞ」の切れと相まって情韻相剰、「朝曇」の気韻を直ひたと肌身に感じさせる。若葉時の心身の弛みをいうのに、お「灸」とはしたり、恐れ入る。

手賀沼のスワン声なき夏はじめ　幸一

手賀沼で初めて蓮見してから十年ばかりになるが、公園縁の船溜まりには、よく八羽連れのスワンを見かける、もとより留鳥。また、蓮見の度に沼の途中や沼尻で何羽か見かけたが、幸一さんの話では、全てで三百羽はいるそうだ。ときには渚でガオガオ鳴きたてたりもするが、大抵は静か、殊に夏の初めは。ありのままの「声なき」がさすが、一面、初夏の日を返す手賀沼の静かな佇まいを余すなく描出する。

強風の中や田植機田を進む　高志

「田を進む」が勘所。「田植機」と「田」を畳み、田んぼの広がりに、面前、田植機をずしんと据える。田を「進む」がいい、これが「植ゑる」だったらただの説明。「ススム」のウ音反復の響き（音調、音量）が、刻々の車輪の回転と、軌道に植え付けられていく早苗の一々までを目に見せるのだ。最初「強風」に重装の「田植機」では、ありきたりと思ったが、むしろ〜「中や」で天地の広景を取りこんだと見るべきだろう。

もぐら出づ交配終へし梨畑　陽一

「もぐら」と「交配終へし」梨畑の配合は意表を衝き、ペーソス綯い交ぜのユウモアがこぼれる。いわれ

てみれば、表土をぼこぼこ盛り上げる這い穴は、梨畑にはいかにもありそうだ。「もぐら」の登場はなるほどと、あらためて納得する不思議。そのふとしたすれ違いが面白い。たくまぬ「交配終へし」が臍である。

一句鑑賞　増田陽一

麦の飯もこもこ噛んで地獄耳　孝三

孝三さん独自の擬声音「もこもこ」が効いている。「もぐもぐ」では底が知れる。麦飯に親しんだ年代の矍鑠とした老婦人、「姑」も古手であろう。知らぬ顔をして、ひそひそ話の悪口などは全部聞いている、「いつも二階に肌ぬぎの祖母ゐるからは」（飯島晴子）「蛍とび疑ひぶかき親の箸」（〃）などという系列の奥深い老年像を連想させる傑作でしょう。

手賀沼のスワン声なき夏はじめ　幸一

沼が賑やかなのはむしろ冬である。近年数は減ったけれど渡ってきた鴨の大群がそれぞれの種類の声を挙げて騒いでいた。それが引き上げると、棲みついた瘤白鳥の小群が頸うなだれて遊弋するのみ。夏初めの沼にふと寂しさを感じる時である。「スワン」という、なめらかな語によってきれいなリズムが生まれ、情緒が深まっている。

麦飯の零れ易きを嘆きつつ　昭七

（疎開生活ありき）の前書きがあり、われら戦中派にはよく判る。麦は米より煮えにくいので『押し麦』にしたり、それも無くて戦中は麦だけ先に煮たものを改めて米に混ぜて炊いた。冷えるとぼろぼろと零れ易かったけれど、麦だけなら恵まれた方で、芋ならご馳走のうち、果ては薩摩藷のツルや海藻まで混ぜた飯だった。嘆きつつも喰えれば有難かったのである。

山盛りの麦飯茶碗鷲づかみ　高志

何と豪快な食欲であろう。時代劇の一齣で、演ずるは三船か阪妻かというところ。この健啖さは現代人の（僕だけか？）失ったものである。一息に詠まれた勢いが良い。

二杯目の麦飯女ざかりかな　紀子

という女性版もあった。「女ざかり」とは何か、との論議もあったけれど、いま流行の痩せ願望などとは無縁で、日本国の将来を明るくする。因みにボーヴォワールの自伝『女ざかり』の原題は『年齢の力』となるようであり、麦飯二杯の若さとも通じ合う。

なま街道きて観音のご開帳　みち

「なま街道」とは、銚子で採れた鮮魚を利根川から布佐で陸揚げしたあと馬で松戸まで運んだ道と聞いている。松戸からは江戸川を江戸まで運んだらしい。小生余り知らないけれど、「なま街道」と「ご開帳」の取り合わせが何だか面白い。どこの観音であろうか、途

中に布佐の馬頭観音もあるけれど。

囀りて枝うつりする巣立鳥　　正美

自解では四十雀とのことであった。最近この鳥は増えているのではなかろうか。あまり人見知りをしない鳥だから、庭にもよく来てくれて楽しい。人家の周辺でも営巣するのである。細かく枝移りするのも雀類からるぃの特徴が出ている。

ハガキ句63報（'12・1・25）

初夢の人魚に残る鰓のあと　　孝三
冬尺取蛾の儚き影に年逝けり　　陽一
八階まで門松なけれ初筑波　　悦子
喰積の外もてなしのビーフシチュー　　高志
初鏡背ナに物指し入れて見る　　みち
元日や昨日と同じ化粧する　　弥栄子
年初めもっともらしき予定表　　陽也
初鏡時計の針が逆である　　啓泰
一束の賀状届いて昼餉かな　　敦子
地球の軸斜めに自転初日の出　　羊三
初雀御饌のあぶらげ引張り合ふ　　三郎
産土へ長汀伝ひ初詣　　ひろし
生かされて九十四年お正月　　圓子
去年今年余生と云ふを引きずりて　　璃子
丘の辺に家々ひかる初景色　　美清流

ハガキ句63報　管見　　飯田孝三

冬尺取蛾の儚き影に年逝けり　　陽一

冬尺取蛾は、鱗翅目シャクガ科の蛾。翅の薄い弱々しい翅の小型種ばかりで、雌は翅が退化。冬に生れ、晴れた日に活動する。影は光陰姿の三義一態。逝く年、時移る思いを重ねるのである。結「けり」はつくづく感慨の深さ。

八階まで門松なけれ初筑波　　悦子

マンション高階からの初筑波眺望。そういえば、館内、以前はどこそで門松を飾ったが、今年は、八階まで一つも見当たらない。さもありなん。街中でも、随分減ってしまった。当世正月風景のワンカットである。「門松」と「初筑波」の重なりがちょっと気になる。

初鏡背ナに物指し入れて見る　　みち

元旦、鏡に向かって背筋をシャンと正す。思わず、新年の瑞気に和するのである。「見る」は、ふとその場でそうする謂い。敢えてする、その軽妙な断定が秀逸。巧まぬ、ころやかな諧謔の気を味わうべし。かつて、日本海軍に精神棒なる物があった。棍棒である。こちらは本当に水兵の尻を叩いた。物指しは元来竹製。竹は日用品材。その撓みと雅びはつとに肌身。又、古来

竹は日本文学に必須、「竹取物語」、下って「越前竹人形」。過ぐる戦の「ビルマの竪琴地」の地にも、竹はふんだんにあっただろう。緯度の高い欧米の地にはない。いやはや余談。えっ“孫の手”の代わり？そういうあなたは、詩の高尚も俳の諧謔もお分かりでない。

元日や昨日と同じ化粧する　　彌榮子

元日だからとて、普段と何も変わらない。特別の感慨はないという感慨。類想がありそうだが、「化粧する」が女性の主情句。ただ、「元日」の今日と昨日は常識風。例えば「きのふおととひと変わらぬ初化粧」なら“普段なり”がより出る。「～初鏡」だと、主情が薄れ、客観の視角が加わる。

年初めもっともらしき予定表　　陽也

“一年の計は元旦にあり”は言い古された訓。さて、「もっともらしき」に、そこはか三日坊主の臭い。さりながら、今に、予定表を作成するあたり、感服しきりである。実業多繁な日常が思われる。男の含羞と余裕が交る諷詠である。

初鏡時計の針が逆である　　啓泰

鏡の映像は物すべて左右逆。当たり前である。元旦、あらためて目に留めたのがミソ。目に留めたのが時計。針が刻々時を運ぶ。きっと大きな古時計に違いない。鏡中の向きが逆でも、針は逆には回らない。「～である」の断定がけれん味なく、快哉。

一束の賀状届いて昼餉かな　　敦子

「一束」は、ぶ厚からず、さりとて薄過ぎない。賀状を読み終わると、賀客は二日から、お日和で穏やかな元日である。さて、昼餉にしようか。「届いて」の間が非日常の安らぎを伝え、「一束」との呼応がいい。「かな」が生きている。

地球の軸斜めに自転初日の出　　羊三

地軸の傾斜小学教室で習った知識。それは頭の中の認識。目には見えない。だが、不思議、この句の勢で見えてくる、地球のめぐりが、地球に上る初日が。何やら、宇宙衛星にいる気分だ。尤も、地球儀のような軸棒はないが、傾いで回る。ふーむ、二十一世紀は宇宙時代か。いや待てよ、人間世界の時局風刺かも知れない。危ないあぶない。

初雀御饌のあぶらげ引張り合ふ　　三郎

お正月のご馳走、神様と人間だけじゃずるいよ、そりゃ。それ、おいらも肖ろ。“初雀負けるな爺婆ここにあり”。

産土へ長汀伝ひ初詣　　ひろし

故郷の鎮守への初詣である。川沿い、あるいは湖の廻りを行く。鎮守はさほど遠方ではないだろう。さりとて極く近場ではない。道中、そこかしこに、竹馬の

友と遊び興じた思い出がある「長汀」を歩み来った日月を振り返るのである。

生かされて九十四年お正月　　**圓子**

人生五十年は昔、今や、日本は世界に名だたる長寿社会。然も、九四歳は、男の平均寿命を遥かに凌ぐ長寿である。矍鑠、悠揚、自足の態、めでたし。偏に、慶賀の到りである。

去年今年余生と云ふを引きずりて　　**璃子**

余生は余分の人生。女性の平均寿命は、確か八十数歳。医者は言う、六十を過ぎると、生体年齢は男女とも全く人それぞれ。よって余生がいつからかも同じく決まりはない。年々めぐり、人は余生というけれど、ご覧あれ、よくよく元気。無音便「引きずりて」に、綽然、世上風刺の趣を見る。

丘の辺に家々ひかる初景色　　**美清流**

丘陵にひらかれた住宅地の初景色である。「家々」は、家並がくっきり見えるほどの数。家群ではない。（ちなみに「家家」ではうるさい。）「丘の辺」の措辞が不思議に懐かしい。「山辺の道」（万葉集）、「しろがねの衾の岡辺〜」（落梅集）。「ひかる」が白眉。言わず淑気を漲らす。あらたまの瑞祥みちる正格の一句である。

初夢の人魚に残る鰓のあと　　孝三

せめて気分のほどは、メルヘンチックに、瑞々しく。

（平24・02・01）

俳窓評論纂

＊楔（2015第32号）が青江由紀夫さんから送られてきた。1985年からの年刊同人誌である。「銀次郎日記」として由紀夫さんの所感を毎号載せられてあるものだ。前号から由紀夫さんの癌闘病日記となっている。今号は、昨年半年間毎月二泊三日の抗癌剤投与の間、過去を妄想・空想されたことを綿々と書かれてある。作詞された詩も掲載されてある。そして果たせなかった女性のこと別れた女性のこと、お見合いも50人以上としたとか告白されておられる。

＊読売新聞の五月19日の長谷川櫂選の俳句に「植田より青田に変はる頃の風（名村佐智子）が掲載されているのを見た。風が主語になっているが、かねがね私が思っていたことを俳句にされているので興味をもった。櫂さんはそういう趣旨では書いてなかったが、植田でなし、さりとて青田でない時期がかなり長くある。毎日眺めていると、そういうことに気づく。植田は十日くらい、青田になるのは、梅雨に入ってからである。それまで一か月くらいは植田青田の過渡期である。この間の季語はないのである。青隙田と云ったらと思う。青田になってしばらくすると稲の花が咲き、稔田にな

り、すぐ稲刈機が入る。山尾かづひろさんの結社の稲作歳時記でもこれに触れていないのでここに書いた。

お便り広場（到着順、敬称略：文末の小文字文は編集子記。）

白金葭四月号頂きました。璃子さんもすっかり常連になりましたね。よかったです。この頃は構造のＯＢと会うことが多くなり、今月は三、四人会います。いろ〳〵と勇気づけられてはいますが、なか〳〵元気にはなりません。本当に皆様すばらしい方ばかりですね。益々のご活躍を祈ります。光成様も奥様も少しはラクをして下さい。（4・23　小山陽也）

白金葭４月号受け取りました。お便りも拝見しました。三歳で良く記憶に残っておぼえていると感心しました。我孫子からの発信平和への祈り　良くおぼえてりっぱな文章になっていると思いました。今年も田植えの準備中です。敏子さんによろしくお体をおいとい下さい。（4・26　健三より）

「白金葭」62号確と拝受有難うございました。先達てお貸しした「橋本多佳子追悼号」早速お役に立てて嬉しいです。それにしても貴兄の速筆には脱帽です。これでなくては一誌は起こせません。光成さんは天才ですね。それから、五月の貴誌定例句会は予定して居ったのですが、予定表を見たら、当日はクラス会が入ってました。悪しからず・・それとは別に貴兄の時間が空いているとき、こちらからそちらへ出向きますので新木駅前あたりでコーヒーでも飲みたいです。連休明けあたりに電話します。（ちょっと見て貰いたいものがあるので）ではまた。（5．2佐藤宏之助）

光成様　会費３千円＋２千円おくります。来月からは３千円送ります。古代は別便でおくりました。六月三〇日の会欠席させて下さい。やはり私は基本が出来ていませんからもう少し時間をみてから再出発します。そのうち俳句のやさしい本でも読みます。（中略）そのうち気楽な会に出席させて下さい。皆さまの益々のご活躍を祈ります。（5・16　小山陽也）

（いつも多大な会費の援助をいただき、お蔭さまでこの度の合同句集の出版が出来ました。皆さまが陽也さんに会えるのを楽しみにされておられます。6月30日の句会は出版祝賀が趣旨ですので、俳人でない方にも案内しております。選句のみでもいいですから、どうか気楽にお出で下さいませ。）

一人ぐらしですのに何で忙しいのか、毎日時間が足りず、朝早く、夜遅い生活から脱けられません。光成家も常よりご多忙の御事と存じ上げますが、手書き雑駁な会報お目通し下さるのに甘え、お送り申し上げます。今夜の地震は震度３でした。大正十二年生れ、関東大地震の時生後八か月でした故か、この程度ではど

うと云うこともありませんでした。アビコは如何でしたか。安泰にすごせる事で、熊本地方の被災の映像を見ると申し訳ない気になります。いずれにしても人力では防げない災害、お互いに発生した時は頑張って切り抜けようではありませんか。梅雨前のさわやか時をお大切におすごし下さいませ。ごきげんよう。

光成様　みち様　（5・16　pm 11:30　璃子）

（我孫子は直下型のようで震度4でした。家のガスの元栓が止まりました。復帰の仕方が解らずその日は風呂なしで寝ました。それから、会報は手書きが本来の俳句報だと思います。芭蕉の連句など皆手書きです。それが何とも言えぬ風雅の味を出しています。今のパソコン処理は、出版社の生活の為と便利さに負けてのことでしょう。）

いつもお世話になっております。小生4月27日大腸ガンの手術で昨日帰って参りました。生きて帰れたのを多とすべきである。5句投句申します。今がんばっています。ご自愛下さい。面目なし。不一

光成高志様　（5・17.青木啓泰）

《璃子さんからの手紙》

前略　昨二十日夜八時四十分みち様からのプレゼント、すごーいサプライズでした。日中花苗の定植をして肉体労働で疲れたせいか、食後居座ってぼーっとしておりましたのでいっぺんに目がさめました。　蚕豆（空豆）とグリーンピースの莢付き、光成ファームのご丹精の旬のお野菜ありがとうございます。野菜と云うと葉ものとか根菜を想像し、豆の類は別格、土が直につくわけでないので別格の気がいたします。小ぶりの見るからにやわらそうな空豆はモチロン茹でて楽しむべく、今剝いでザルの中にあり、グリーンピース（えんどう、青豆）は豆ごはんは月並み故、翡翠豆にいたし、夕食に味がしみるよう只今二十一日、十六時煮ております。小満、初侯の大ごちそうを一人じめいたします。この時期何かとお忙しく、衣類の出し入れ等、大変でお疲れと存じ上げますのに、老人のこと思い出されすばらしいギフト重ねて御礼申し上げます。お文の中に怪我に気をつけよとお書き下さいましたが、六日（金）にやっちゃいました。椿の枝と一緒に剪定バサミの厚い刃で左中指の先を切りました。小さいキズでも血はよく出るもので、白チン（マーキュロ）をよく〳〵かけてバンドエイドでとめ、ドクターが午後休診なのでそのままにし、翌土曜に診てもらいました。白い肉が見えていましたが、化膿もしていず、このまゝで治ると思いました。ドクターのおっしゃるのには「昨日だったらボクは躊躇なく縫いました、まあいゝと思うのでもう一度見せて下さい」と。縫いたかったらしいのに残念そうでした。それから九日（月）に行きま

したら肉は見えていましたが、このまゝ直りそうでしたが、残念そうなので「縫ってもよろしいですよ」と私。ドクター、「遅きに失したけれど、後がキレイだからそうしましょう」と云う訳で二タ針縫わせてあげました。大きなシートの真中から指一本だけ出しマスイをして縫うと云う大げさです。十六日に抜糸して終わり。かゝった医療費一四七〇円（イタミ止のみぐすり、化膿どめのみぐすり、バンソウコのようなもの（これは自費）でした。保険で一割負担ですからありがたいものです。難病、慢性病で医療費のかゝる人の他、今やカゼや私のこの程度でも無暗に医者に行く人が多いので、国保、健保、老人医療皆赤字になる訳ですね。この件自分で治せたのに、と慙愧の思いでもありますが、人間性あり信頼している先生なので。

さて、七十二候ですが、三年ほど前に神宮館（暦を出している）で扱っている書籍で面白そうなのを見ると買いたくなり二三冊買いました（代引きで届きました）。内容も絵も気に入っております。先頃一年生に上がる知り合いのお子さんのお祝いに本を贈るべく本屋に行きましたら、店頭にあるのを見つけており、嬉しい嬉しいサプライズギフトの心ばかりの御礼に何かと思い、本ならばお菓子よりはと思い、行って見ましたら置いてありましたので、お手許に置かれお楽しみ下されば

と存じお送りいたします。同じものを持つのも嬉しい気がいたしますのでお気になさいませんよう。働きすぎなさいませんよう暑い日もありますのが、この季節お楽しみ下さいませ。光成様も沢山のご趣味ですごいですね。うれしいお品の生産者によろしく御礼申し上げております。

ごきげんよう

長屋璃子

五月二十一日

光　みち様

みち様　富山のくすりの「諸常備」と云う袋、とても興味深く方言番付面白いですね。方言俳句と云うのを一、二年前にテレビで放映、その時は何の気もなくテレビをつけたらやっていました。たしか、山形でした。方言にはあたたかさがあり、ナルホドと思うものもありこの濃い黄色の袋大切にいたします。わざわざお使い下さったのでしょうか。璃　（5.21）

先日の例会では、毎度ですがお世話になりました。孫も生きのいい豌豆を喜びました。

三猿

豆飯や齢つくづく肯へり

遅ればせ拙稿〈一句鑑賞〉をお届けします。早くも“真夏日”つづき、ご夫妻ともどもご自愛をお忘れなく、ご健吟のほどをお祈りいたします。草々

（平28・5・23　飯田孝三）

受贈誌（H 28年5月号）

木の芽雨天地繋ぎて鎖樋（彩128号）　平野ひろし
うまごやし花を掲げて盛り上がる（〃）　〃
杉ゆらぎ小楢さざめき青嵐（〃）　〃
誰が吹くトランペットの枯河原（〃）　平山三郎
リュックより突き出る牛蒡年の暮（〃）　山本力枝
アスファルト窪みに光る初氷（〃）　中原芳子
開戦日ゆきずりに買ふ宝くじ（〃）　橘田富子
蒼天を統べ冠雪の富嶽聳つ（〃）　林田澄恵
籾倉の跡の広々牡丹の芽（あすか5月号）　山尾かづひろ
夏近しインドカレーの匂ひして（東京ク5月）　輝子
山寺に届く郵便若葉風（〃）　守啓
空やみて地を白くせりえごの花（〃）　璃子
今日着きし切手の絵柄夏は来ぬ（〃）　文男
余花の雨珈琲館のドア重く（〃）　理佳江
著莪囲む比企一族の眠る墓（〃）　守啓

こだま　（山尾かづひろ吟行ノートH28・5・12）

薔薇の棘悉下を向く不思議　飯田孝三
花びらの重なり捲れ薔薇開花　光成高志
愛子さまの名のある薔薇に近づきぬ　光　みち
相似たりモーツアルトの髪と薔薇　〃

尾崎放哉の句　その二

武者昭七

足のうら洗へば白くなる

小豆島南郷庵時代の句である。この句は心境的に解するよりも島の早い秋の爽涼さを味わうべきだろう。（大野林火「近代俳句の鑑賞と批評」）初秋の季節感が余情として感じられよう。（楠本憲吉「現代俳句評釈」）寂しがり屋の彼にとっては足のうらという非情なものにさえ愛情を感じる（秋山秋江蓼）という批評から「作者の当時の生活情況をことこまかにほじくってもっともらしい理屈をつける深刻ぶったやり方は禁物である」（伊沢元美）というのまで批評はさまざまだ。（以上「上田都史放哉の秀句　潮文社」から）この句について放哉に次のような「自解」があるという（学灯社「現代俳句評釈」）。「体の中で一番酷使する処は足のうらである。それを洗ってやると白くなって淋しそうに、有難うございます、と自分の顔を見て感謝している。他方でオヤと思って洗えば洗うほど真っ白に実に綺麗になってくる」。

放哉の思いが伝わってくる文章である。だとすれば、以下のようなすこし深刻ぶった解釈も許されそうだ。

足のうらを洗うのは「おのれ」の営みであり、白くなるのはおのれを越えた「足」という「かれ」の営みである。おのれのいとなみにかれが応えるのだ。だか

ら放哉はもうひとりではない。足という愛すべき道づれがそこにいるのに気付いたのである。「有難うございます」とはむしろ放哉自身のことばであろう。ここには井戸端で思いがけず「足」という確かな道づれを発見した孤独な喜びが素直に踊っている。日常の暮らしの中で見つけた新しい発見であり、驚きである。ア音シ音を重ねた軽やかなリズムもそれを語っている。

五月の詩

山岡草太

空の青さがとても好き
雪の白さがとても好き
大地のみどり　とても好き
さあ今日は街へ出かけよう
午後二時のプラネタリユム
青い銀河を僕と見て
赤い銀河を君と見る
時計の針は止まってる

我孫子日記

	4/15 例会
	4/20 SOA
	4/27 SOA
＊	4/21～4/28 春の風邪にて臥床
＊2	5/4 上野の都美術館
*3	5/5 芝離宮
	5/11 SOA
	5/13 八重洲
	5/18 SOA
	5/20 例会

＊春の風邪自問自答の時呉るゝ　高志
＊2若冲展五月四日の列とぐろ　〃　〃　〃
*3ビルに囲まれ芝離宮の緑立つ　〃
芝離宮中島あって松手入

編集後記

今月の兼題麦飯はちょっと難しかった。池田勇人の貧乏人は云々の言葉が記憶にあって邪魔をする。陽一さんの戦前の記憶は私は知らなかった。まだまだ、知らぬことが多い。璃子さんからの手紙をみちさんと同居の誼で読ませて貰っている。毎月知らぬことを教えてもらっている上、ユーモア滲む文章にくすとしたり、思い切って哄笑したりする。これが編集の余得というか、楽しみである。どうか、俳句にならぬ時は、詩でも手紙でもありのまま書いて送っていただけるとありがたい。五月号は63号になります。60号までの俳句とエッセイを記念号としてまとめたものを同封して送ります。銀座句会までに一読くだされば幸いです。

白金葭5月号（第63号）平成28年5月発行
編集・発行人　光成高志：（〇四―七一八七―一〇六八）
発行所　270・119　我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字：加納綾女。写真：5月25日の白金葭